

帆樫成林

—はんしょうせいりん—

新潟市歴史博物館
博物館ニュース
vol.35

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」を
イメージしました。

CONTENTS

特集1	みなとびあの「たいけんプログラム」	P.2~3
特集2	第十二回むかしのくらし展 子どもたちがみた「戦争とくらし」	P.4
歴史さんぽ	弁天の松	P.5
おすすめの一冊	「スノアキコのひとり古墳部」	P.5
みなとびあ 研究notes	まどい 浪祭復元事業と三番組の纏について	P.6
館長日記	「小さいおうち」考	P.7
収蔵資料紹介	二代目昭和橋の橋名板	P.7
博物館 あちらこちら	塔屋から河口を望む	P.8



新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.35

【たいけんのひろばプログラム】 楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
10月12日(月) 10:00~15:00	ボランティア フェスティバル	ボンボン船や紙ヒコーキなど、さまざまなプログラムを同時開催!	申込み不要
10月25日(日) 13:00~16:00	どんぐりで遊ぼう	どんぐりを使っておもちゃやアクセサリを作ります。	申込み不要
10月31日・11月1日(日) 14:00~15:30	綿から糸へ 糸紡ぎしてみよう	綿から糸をつくります。種を取ったり、綿をやわらかくしたり、糸を紡いだりするための道具を使ってみましょう。	申込み不要
11月1日(日) 10:30~12:00	親子で自然体験して みよう	みなとびあの庭園で、秋の自然を体験します。	要申込み・ 未就学児と保護者先着15組・無料
11月15日(日) 14:00~15:30	こども歴史クラブ 拓本でモノの形を写し取ろう	墨と紙でモノの形を写し取ります。	こども歴史クラブの部員が対象です
11月21日(土) 14:00~15:30	みなとびあもめん部	糸紡ぎや機織りなどに興味のある一般の方々とともに、博物館資料を使いながら、昔の手仕事を再現する試みです。	もめん部部員が対象です
11月29日(日) 14:00~15:30	ワラのコースター づくり	ワラを編んでコースターを作ります。	要申込み・先着10人・無料
おとなのたいけんプログラム			
11月23日(月) ①10:00~②14:00~	鮭の塩引きづくり	むかしながらの鮭の塩引き作りを体験します。鮭をさばいて塩をすり込むまでを体験。塩漬けと乾燥は参加者が自宅で行います。	要申込み・16歳以上32人(応募多数抽選)・ 参加費2000円予定
11月28日・12月5日(土) 14:00~16:00	ワラソウリづくり	【おとなのたいけんプログラム】 むかしながらのわらぞうり作りを体験します。全2回です。	要申込み・全2回参加できる16歳以上 9人(応募多数抽選)・無料

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっておりますので、詳細は当館までお問い合わせください。

現在 開催中の企画展

第12回 むかしのくらし展 「戦争とくらし」

戦争によって身近なくらしの風景が変化していった様子に気づいてもらい、戦争という出来事の影響力の大きさを五感で感じてもらう展覧会です。

会期 2015年 9月12日(土)~12月6日(日)

休館日 10/5(月)・13(火)・19(月)・26(月)
11/4(水)・9(月)・16(月)・24(火)・30(月)

観覧料 無料 *常設展の観覧は有料です。

主催 新潟市歴史博物館

協力 新潟市日和田山小学校

関連事業
■ 大人のための展示解説会：毎週日曜日 午後2時~(約1時間)
■ 戦時中の流行歌：毎日エントランスホールで

次回 企画展

みなとびあ歴史発見プロジェクト にいがた みなとの仕事 いまむかし

みなとびあが位置する新潟西港のさまざまな風景とともに、新潟西港に関わる仕事の移り変わりや港の歴史について紹介します。

【会期】 2015年12月19日(土)~2016年1月31日(日)

【休館日】 12/21(月)・24(木)・年末年始12/28(月)~1/4(月)
1/12(火)・18(月)・25(月)

【観覧料】 無料 *常設展の観覧は有料です。

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】 13:30~15:00 【会場】 本館2階セミナー室
【申込】 不要(当日受付・定員80人程度)
【資料代】 100円(資料のない回は無料)

- ◆ 10月の講座：10月25日(日) 講師：小林 隆幸
「新潟美人再考」
- ◆ 11月の講座：11月22日(日) 講師：田嶋 悠佑
「新潟開港小史—江戸初期における新発田藩の政策を中心に」
- ◆ 12月の講座：12月20日(日) 講師：森 行人
「魚とりと稲作」

博物館 あちらこちら 塔屋から河口を望む

モノクロ写真は、新潟税関庁舎の塔屋から信濃川の河口を望んだ明治初期の風景です。カラー写真は、現在の同じ角度から。木々が茂り、高い建物が増え、川幅が狭まったことによって、かつてのそれとは趣を異にします。塔屋はふだん登ることはできませんが、年に何度か見学会などでご覧頂ける機会があります。その際は是非!



編集後記 現在みなとびあでは、兵馬俑(へいばよう)が来館されたみなさまをお出迎えしています! 兵馬俑は、秦の始皇帝が埋葬された陵墓にともに納められた兵士や馬の土製の像です。死後も始皇帝を守るための軍団で、その数は八千体にも及びます。そのうちの一体、將軍俑のレプリカが、中国西安より友好の証として贈られたのです。等身大の堂々たる將軍に、ぜひ会いに来てください。(中村)

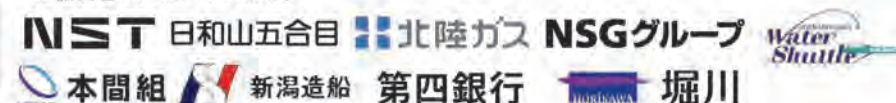
お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとびあ
住所：〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel：025-225-6111 Fax：025-225-6130
E-mail：museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/4)
【開館時間】 (4-9月)9:30~18:00 / (10-3月)9:30~17:00



みなとびあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、まもなく開港150周年を迎える新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



「三番組の纏(山車)」
かつて祭りの行列を賑わせた山車を、みなと新潟実行委員会主催「浪祭復元事業」により組立て、みなとびあエントランスホールにて展示しました。

帆樫成林「はんしょうせいりん」第35号
編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
印刷／株式会社ウエッザップ 発行日 平成27年10月2日

みなとびあめの「たいけんプログラム」

藍野 かつり

みなとびあめの「たいけんひろば」は、地域のくらしの知恵や、広く歴史・文化に関わる事象をこどもたちに伝える場として設置されました。主な対象はこどもですが、展示されているむかしの暮らしの道具や、遊び道具などを通して、こどもからおとなまで広く楽しんでもらえるよう、また、おとなもこどもも楽しんでもらえるような体験活動や資料展示などを行い、たいけんひろばを運営しています。

▼たいけんプログラム

「たいけんひろば」の特色といえは、ほぼ毎週末に開催している「たいけんプログラム」です。平成十六年の開館から昨年度末までの間にのべ七、四回のたいけんプログラムを実施し、一万二〇七七人に参加してもらいました。

たいけんプログラムは、むかしのおもちゃ作りなどの創作体験、むかしのくらしの道具を使う体験、博物館の施設や役割を周知するものなど多岐にわたります。どのプログラムも気軽に参加してもらえるように、二時間程度の体験活動となるように企画しています。これらの体験が、地域の歴史文化に興味を持って

もらったり、文化財保護の意識を持ってもらったりするきっかけになるようなプログラム作りを心掛けています。

これらプログラムの企画・運営は学芸員だけでなく、たいけんひろばボランティアも担っています。たいけんひろばで活動するボランティアスタッフには、手芸や工作などの特技を持つ人や、紙芝居、ネイチャーゲームといった他団体ですでに活動している人など、「その経験をたいけんひろばでも活かしたい」と参加している人もいます。ボランティア企画として、彼らの経験・技術をたいけんひろばの活動に活かし、歴史博物館らしい地域の文化や歴史の解説を織りこんだプログラム開発を職員と一緒に行っています。

これまで、さまざまなたいけんプログラムを企画し、実施してきました。定番となったプログラムも、参加者の反応を見て、プログラムの進め方や下準備の方法などを工夫し、少しずつ進化しています。好評を得て定番化したものだけではなく、ありません。中には、企画段階でお蔵入りになったもの、実施したもの、実際に参加者の反応が思ったほど良くなかったため一度きりになってしまったものもあります。さまざまなプログラムの中か

ら、博物館らしい展開をみせたプログラムについてご紹介します。

▼織り姫プロジェクトと「布をつくってみよう」

平成十七年度に布を織る仕組みを知ってもらいたいと学芸員が企画したプログラムがありました。段ボールを使った簡単なものですが、参加者の反応はそれほどよいものではありませんでした。このプログラムのサポートに参加していた複数のボランティアスタッフから、「このプログラム、アイデアはいいのに……」「もっと面白くできるはず」という声がありました。

そこから、「布を織る」ということについて分かりやすく、身近なものを利用してできるプログラム作りがボランティアスタッフの中で立ち上がりました。「織り姫プロジェクト」と銘打って、月に一度のペースで勉強会が行われました。(写真①)

単に布を織る、ということではなく、高機の機構が分かるようにした方が良いのではないかなど、プログラムの骨格となる部分が話し合われ、プログラムで使用する織り器の開発が行われました。



写真①

ムの背景にはこのようなボランティアスタッフの工夫がありました。

多くのボランティアスタッフが関わって成長した「布をつくってみよう」のプログラムですが、「高機の仕組みを伝えるものだから本物がそばにあると分かりやすい」とか、「本物の機も使えるならもっと興味を持ってもらえるのではないか」という意見が出るようになりました。そこで、織り姫プロジェクトは収蔵資料の高機を復元する次のステップへと進みました。

当時、当館には体験活動に使えるような高機はなく、寄贈された機の部品があるだけでした。さらに、きちんと組み立てられるかどうか、その部品も揃っているのかどうかさえ分からないものでした。そこで、これらの資料を調査し、組み立てることになりました。調査の結果、間丁、ロクロがないこと、箴棒の一部

が破損している状態であることが分かりました。そこで、地元の建具職人さんに相談し、足りない部分を作ってもらい、高機を復元しました。(写真②)

次に必要なのが、布を織るための経糸の準備です。これについては、市内で裂き織り作家として活動されている方に指導してもらいました。ヘバの使い方、経糸の作り方、高機への経糸のかけ方などを複数回にわたって教えていただき、布を織れるようにしました。そして、平成二十二年度には高機で裂き織りのコースターをつくるたいけんプログラムができるようになりました。(写真③)

▼「みなとびあめん部」の発足

機の復元を通して、ボランティアスタッフ限定の活動ではなく、興味のある市民の方々とともに活動することや、布作り

に関わる他の工程も知って活動の幅に広がりを持たせたい、という意見が出てきました。そこで、平成二十四年度から、たいけんひろばの活動に「みなとびあめん部」を発足させました。この「みなとびあめん部」は、博物館資料として収蔵されている資料群を用いて、布生産にまつわる一連の工程を再現し、興味のある方々とともに体験すること、道具の意味、使い方、技術などについて体験から学ぶことを目的としました。

毎年四月に部員を募集し、二か月に一度活動しています。部員の年齢層も幅広く、小学生から大人までいっしょにワタ打ちや糸紡ぎなどを行っています。初年度から活動している部員が多く、今では難なく糸紡ぎができるようになっていきます。昨年度は、自分たちで紡いだ木綿糸を緯糸にしたコースターの製作にまで到達しました。四年目となる今年度は、経糸も自分たちで紡いだ糸を使って、白木綿を織ることを目標に活動しています。

▼今後の展望

布の生産に関わる技術はそれぞれ奥深いものです。機織りひとつとっても、さまざまな技術を要します。より高度な製織技術を学ぶという方向性もあるでしょう。

染織や、原料となる棉の生産など、幅広くその技術を学び、すべての工程での手仕事を体験する、ということも考えられます。それぞれの技術に興味のあ

る市民の参加により、活動の輪が広がるかもしれません。

蒲原平野の布生産の歴史について考えると、信濃川・阿賀野川の自然堤防沿いの地域などでは、江戸時代から明治時代にかけて、綿花栽培がさかんでした。大野綿・新飯田綿など、越後国内でのブランド化も進んでいました。また、亀田綿・葛塚綿・小須戸綿・白根絞・吉田白木綿などは、地域の中で製糸から製織への分業がなされるなど、地域全体で支えられていたブランドでした。生産の歴史については追体験を経たからこそ理解できることもあるかもしれません。地域の布生産の歴史を掘り下げることにも興味深いことになりそうです。

新潟市内では、現在、地域で亀田綿や小須戸綿の掘り起こしが行われ、それぞれの地域の文化の核とする動きがあります。各地域で活動している人々と交流することで新たな活動の芽が生まれるかもしれません。

活動の展開はいくつかの方向性が考えられますが、いずれにしてもたいけんひろばを舞台に、一般市民の参加者、ボランティアスタッフ、職員の皆が楽しく学び、もっと知りたい、体験したいという好奇心が持続するような、幅広く奥深い体験活動を目指したいと思います。

また、この例にとどまらず、ひとつのプログラムが次のステップにつながり、新たな博物館活動を生み出す「活動の種」を見つけられるよう、アンテナを張った運営を心掛けたいと思っています。

(あいの かおり 学芸員)



写真②



写真③

秋から冬にかけて、当館では毎年「むかしのくらし展」を開催してきました。この時期は市内の小学生、とくに三年生の団体観覧が集中する時期であるため、彼らの学習目的にあわせながらさまざまな切り口で「むかしのくらし」を紹介してきました。

十二回目となる今年は「戦争とくらし」をテーマにしました。戦後七〇年の節目にあたって、戦時下の人々、とくに子どもをとりまいていた状況を知ってもらうと考えたからです。

ただ、「むかしのくらし展」で戦争をとりあげることには、少し難しい面もあります。それは、展覧会が想定している小学三年生という学齢は、太平洋戦争を含む日本の近現代史をまだ学習していないということなのです。

現在の学習指導要領では、三四年の社会科で、まず地域の産業や生活について学ぶことになっています。五年生になるとそれを日本全体の学習に発展させ、六年生でようやく歴史の学習に入ります。つまり、自分たちのいまの社会を理解したあとに、異なる時代の社会、制度を学習する、という仕組みになっているのです。

社会科に限らず、このような学習課程に大きく関わっているのが、子どもの思考発達段階です。二〇世紀スイスの

心理学者J・ピアジェによると、日本の小学三年生にあたる歳ごろは、物事を観察して、そこから客観的な特徴をひき出す力が身につく時期とされています。けれども具体的なモノを離れて、それを抽象的な概念に置きかえて考えられるのは、一般には高学年になってからのことです。三年生は、具体的なモノを介在した学習体験を充実させるべき時期といえるでしょう。

たとえば、戦時中の子ども向け雑誌を三年生がみた場合、その雑誌の特徴をさがして、自分が知っている雑誌との違いを指摘することはできるでしょう。しかし雑誌を脇に置き、当時の統制事情を説明して理解させるのは、彼らには難しい課題です。説明の仕方が問題なのではありません。概念を言葉で受け止める準備がまだ十分にできていないのです。したがってこの展覧会が小学三年生にとって有意義な体験となるには、彼らが自発的に観察したくなる資料をうまく選びとり、そこから何かに気づかせ、考えさせるような手立てが必要でした。

そこで、今回の展覧会は「資料そのもの」から話題が抽象化しすぎないように、伝える内容の深さを慎重に抑制しました。揭示文はごく短く、「説明」ではなく「問いかけ」で、資料をみることを促すように配慮しました(図)。文章の作成にあたっては新潟市立日和山小学校の滝澤先生並びに八幡先生に監修していただきました。

展示室は、(子どもの世界へ小学校へくらし)という三つの部屋に分かれています。それぞれの部屋には六つの展示コーナーが並置されていて、それらを自由な順番でみて回れるようにしました。戦争を概念化してとらえることが難しい子どもたちが、戦争によるくらしの変化を「実相」としてとらえることができるように考えたものです。また順路を定めぬ展示構成は、資料ごとの同時観覧者を分散させるため、限られた時間に効率よく観覧したい団体には

特に有効でしょう。なお、展覧会には子ども以外にもさまざまな人たちが訪れます。戦争体験をもつ世代の方や、より詳しい情報を求める方々もおられるでしょう。そのため会場には補助解説も掲示しますが、いっぽうで、小学生に向けたこの展示を、大人にもそのままみてほしいという願望もあります。歴史について、戦争について、社会やくらしについて、子どもたちがどれだけの奥行で世界をとらえているのか――。ときに、私たち大人が立ち止まって顧みることも、この展覧会の密かなねらいであるからです。

(きむら ひとやす 学芸員)



「一般的な解説」ではなく「問いかけ」で観覧をうながす。この国民学校六年生用の図画の教科書では、配色の学習が「どんな訓練になっているか」となぞかけをしている。(初等科図画男子用第四「昭和十八年、文部省」)



弁天橋(昭和30年前後)

歴史さんぽ



弁天の松

新潟市中央区弁天橋通

新潟駅南口からまっすぐ亀田方面へ進むと、鳥屋野潟にかかる橋、弁天橋を通ります。潟の東端にあたり、幅が狭まって栗の木川へつながっていく部分です。この弁天橋の南側のたもとに松が立っています。

江戸時代半ばころ、地元姥ヶ山の名主津兵衛という人物がそこから見える弥彦山を拝み奉納する意味で植えたとか、田地開拓の成就を祈って植えたなどと伝わりますが、詳しいことはわかりません。「一本松」「舟つなぎ松」「ブザイテン(ベザイテン、弁財天)の松」などと呼ばれていたといいます。「弁天橋」の名はここからきているのです。

弁天橋が架けられたのは昭和25(1950)年のこと。幅わずか2.7mの木造の橋だったそうです。それまで、潟の南岸に位置する姥ヶ山・長潟などの住民が沼垂・新潟へ出るには、舟で潟を渡っていくか、大きく迂回して歩いていくしかありませんでした。昭和22、23(1947、48)年頃、両岸に鉄線を張り渡し、それを手繰り寄せて対岸へ渡る無人の渡し舟ができましたが、橋の建設が待ち望まれていました。架橋の三年程後には大型車が通れるよう拡幅され、昭和43(1968)年にコンクリート橋となり、平成13(2001)年には四車線化されて現在に至っています。

かつて、低地の中に一本そびえ立った松は、ひときわ目立つランドマークだったことでしょう。生活の足としての舟が、この松を目当てに潟の出口を目指し、栗の木川に出て沼垂へ、また亀田方面へと向かいました。天候が荒れると

海のように白波が立つこともあり、水難事故が多かったようです。松のそばには、その供養のため建てられたという地藏堂があります。「地藏」は坊主頭が特徴的な菩薩のことで、人の苦しみを引き受けてくれるとされます。「弁財天」は七福神の一人として知られていますが、もとはインド神話の川の神が仏教に取り入れられたもので、水との関わりが深い存在です。日本では中国風の衣装をまとった女神の姿が定着し、風光明媚な池や湖によく祀られています。

信濃川などの河川に囲まれた低湿地亀田郷の中でも、最も低地にあたる鳥屋野潟周辺は、常に水害に悩まされていた土地です。一方で、人々は「弁天の松」をはじめとして鳥屋野の風景を愛でてきました。地藏と弁財天の共存は、そのようなかつての生活を象徴しているかのようです。

周囲の景観だけでなく、工事に伴う伐採や移植などで松の姿も様変わりしています。それでも松は残り、鳥屋野潟とその向こうに弥彦山・角田山を眺めることができます。弁天橋を通る際には、ぜひその名の由来となった松の存在を思い出してください。

中村 里那 (なかむら さとな 学芸員)

おすすめの1冊

スソアキコのひとり古墳部

難しいことはさておき、古墳を楽しむ。それを実現すべく、今年四月に「みなとび古墳部」が立ちあがりました。現在、年一回の古墳見学を基本に活動を開始しています。

その活動の参考になるのが本書です。著者による古墳見学の様子を漫画でわかりやすく紹介しています。古墳に向かう道中、現地での古墳見学、さらに食事を含めた見学後の楽しみなど、古墳見学にもなる二連の行動を著者のユニークなキャラクターとともに描いています。著者はイラストレーターで、古墳や歴史の専門家ではありません。そうした歴史の素人の視点で共感を呼びます。一方、登場する古墳や出土品のイラストは簡潔ながら特徴をおさえています。時折見せる細密なスケッチ画にはドキッとします。このあたりはさすがプロです。

本書の優れた点は、歴史学習にとらわれず、古墳を訪ねること自体が楽しいと思わせるところです。本書を開くと、古墳見学に出かけたくなります。

(小林 隆幸 学芸員)



スソアキコ著
イースト・プレス
2014年11月

湊祭復元事業と三番組の纏まとについて

渡邊 久美子

今年度、当館では文化庁の支援を受け、関係機関や市民団体と「みなと新潟実行委員会」を組織し、湊祭復元事業を実施しています。

湊祭とは、現在の新潟まつりのルーツの一つに数えられる、江戸時代から新潟町で行われた住吉社の祭りです。七夕に行われたことから七夕祭りとも言われました。湊祭は明治五(一八七二)年に県令楠本正隆により禁止されますが、以後復活と中止を経て、戦後新潟まつりとなり、その情景は今日の住吉行列に引き継がれています。

湊祭復元事業では、江戸時代の湊祭について、古文書等の資料調査を行い、その成果をパネル展等で紹介し、地域文化の理解を深め、これからの町づくりを活かすことを目的としています。

では、この湊祭とはどのようなものだったのでしょうか。江戸時代の湊祭について、天保十四(一八四三)年十二月の「新潟市中風俗書」から紹介します。祭りは七月一日より七日までの期間に行われ、新潟町を二十二に分けた各組が参加するものでした。一日から六日は、各町の町内で祭り太鼓が叩かれ、夜は大鼓や笛のお囃子とともに子どもたちが小さな灯笼を手に歩きました。湊祭が最も賑わうのが、七日の住吉神の神輿渡御です。神輿は前日六日、住吉神の

故地である洲崎町の御旅所(神輿を安置する場所)へ移されます。七日朝に、洲崎町が一番組として神輿を船に乗せ渡御が始まります。神輿渡御には、八番組までを昼祭、九番組から二十二番組までを夜祭といって昼夜に分かれて祭りを賑わせました。

昼夜の湊祭の行列を列記した嘉永二(一八四九)年「湊祭番附」を見ると、昼は纏、傘鉦、踊屋台、夜は纏灯笼、町内提灯などと今の新潟まつりでは見られない出し物があったことがわかります。これら個々については後日に譲るとして、今回は「纏」という出し物について紹介します。今年七月、事業の一環として博物館に寄贈されていた部材を組み立て、約一ヶ月程展示を行いました。

纏と言うと、町火消しが振るうものが想起されますが、湊祭では各組の象徴として、行列の先頭に出されたものだったことが古文書から伺えます。纏は昼祭に出され、数人で持つものや車の付いたものだったようです。纏ごとにそれぞれ装飾があり、その詳細は文久三(一八六三)年の「湊祭行列帳」、新潟町の役人だった早川清作が明治二二(一八八八)年に記した「星霜雜記」からわかります。

今回、事業で組み立てた纏は、三番組のもので、三番組は、江戸時代は本町

通十七軒町、同十四軒町、大川前通十七軒町、同十四軒町から構成され、現在の本町通十一番町、上大川前通十一番町に相当します。この纏は戦後、本町通十番町の方々が管理し、新潟まつりの住吉行列に曳き出されてきました。

三番組の纏は、台の周囲と腕木に黒漆、擬宝珠の高欄には朱漆が施され、「三番」と書かれた額、翼を広げた丹頂鶴、金色の雲間からのぼる日の出をあらわした装飾が目をはきみます。この纏の製作年は、資料が見当らず、よく分かりません。しかし先述の「湊祭行列帳」に

「纏 車付 壹本 但日ノ出ニ鶴之図 中六尺高一丈五尺」、「星霜雜記」には「纏 日ノ出ニ鶴之図 幅六尺高壹丈五尺 車付挽物」とあり、江戸時代の装飾を引き継いでいるものと思われま。纏の中心に一本の柱を据え、額を掲げていますが、本来は柱の先端に剣が取り付けられていました。戦後、祭りに出した折り、電線に当たると柱を替え、今回組み立てたように、剣は台の隅に取り付けるようになりました。戦後の住吉行列の様子を旧蔵者である本町通十番町の方(大正十五年生)に伺ったところ、年によって学校町や榎谷小路に向かうこともあったそうですが、大抵の順路は五菜堀で下町から渡御してくる



御座船を迎え、広小路まで供奉したそうです。
網干嘉一郎氏が「新潟市文化財調査報告書二(一九七三年)」で、三番組のほか、四、五、八、二十番の纏の存在を述べており、八番組が現在も住吉行列に纏を曳き出していますが、その他の番組のものも所在は不明です。湊祭に関する実物資料は少なく、三番組の纏はかつての祭りの賑わいを伝える貴重な資料と言えます。
(わたなべ くみこ 学芸員)

『小さいおうち』考

小説『小さいおうち』(中島京子二〇一二年、映画化二〇一四年)には、総力戦時代の近現代史が縮図のように取り込まれている。この作品の主人公、女中のタキは主人の時子の使いで、時子の姉を訪ねる。そして帰ってこう報告する。

「この前の地震で、東京中がすっかり焼けて、あれだけ家だの財産だの、持つもんじゃないって思い知らされたのに、よくママ建てる気になったわねえ、と、こうおっしゃるんですよ」

大正十二(一九二三)年の関東大震災後、昭和初期にサラリーマン家庭である時子の家では、東京の山手に「中廊下型」の間取りの「小さいおうち」を建てた。昭和二(一九一七)年に雑誌「住宅」が主催した、①「家五人(夫婦、子供二人、女中一人)②造作付きで二五〇〇円という条件の設計コンペで、「中廊下型」の家が一位になっている。流行の住宅に資力を費やす妹時子に、姉は厭味を言ったのである。

さらにタキは、時子の姉が「教育熱心」で、難関中学校を目指

す息子の「お受験」に入れ込んでいと、皮肉っぽく時子に報告する。姉は「家だの財産だの」のはかなさを感じ、子供の教育、進学に期待を寄せ、教育費を惜しまない。

日本が大正デモクラシーを経て総力戦へ向かう昭和初期、家族史の流れのなかに「小さなおうち」も「教育熱心」も現れる。

小林嘉宏は、大正期に子供は常に「教育的配慮の眼差しに曝され続け良い子」として振る舞うことを期待されるようになるが、これは子供にとって「幸福」なことかと問う(「大正期『新中間階級』の家庭生活における『子供の教育』」(『福井県立大学論集』第七号一九九五年)。また、高額の教育費を親が負担するという政策もこの時期に淵源があるという。

モデル化された「小さなおうち」に住んだり、子供の教育に力を注いだりする家族のありかたが、総力戦時代にはじまり、現代につながっていることは軽視できない。

収蔵資料紹介

二代目昭和橋の橋名板

現在、信濃川の河口近くから数えて四番目に架かっているのが昭和橋です。昭和橋のルーツは戦前にさかのぼります。これまでに二度架け替えが行われ、初代と二代目の橋は「昭和橋」と呼ばれていました。

昭和橋が建設されるきっかけとなったのが、大正十二(一九二三)年の大津分水の通水でした。信濃川に新しい河口が開かれ、もともとの河口だった新潟市付近では水量が減って両岸の埋め立てが可能となったのです。昭和三(一九一八)年から萬代橋上流の埋め立て工事が始まります。埋立地の開発を促進するために県会議事堂付近(一番堀通り)と鳥屋野を結ぶ新橋の建設が昭和五年七月から始められました。これが初代昭和橋で、翌昭和六年八月二十日に開通しました。橋は橋長約三〇五メートル、幅員七三メートルの木造橋で、橋板の上に土や砂利を敷いて補強をしていました。

初代昭和橋は約十八年間使われました。しかし痛みが著しくなり、昭和二十四年七月から昭和橋の架け替え工事が行われ、同年十二月六日に開通式が行われました。これが二代目の昭和橋です。二代目昭和橋は橋長約二八〇メートル、幅員六メートル、引き続き木造の橋で、土や砂利を敷いた構造でした

が、バスやトラックの通行も考慮し二〇トンの重量に耐えられるよう初代より強固に設計されていました。なお、架け替え工事の際には船による代替輸送が行われました。当時の新聞には非常に混雑している様子が報じられていて、昭和橋が市民生活に欠かせないものになっていたことがわかります。

昭和三十九(一九六四)年の新潟国体開催に合わせて新橋(現在の昭和橋)を架橋することとなり、二代目昭和橋は昭和三十七年三月からの架け替え工事によって解体されました。博物館に残る橋名板は縦二〇センチ、横四〇センチの銅製と推定される板二枚で、「昭和橋」「昭和二十四年十二月竣工」の銘があります。約十五年間という、短い使用期間だった二代目昭和橋の歴史を伝える資料です。

(田嶋 悠佑 学芸員)

